

日本の初夏〔中〕

鶉澤 四丁 譯

やがて松葉が躑躅のある可い處を見つけて來た、それに可い室もあるといふのであつた。それはテンネンジといふ小さな佛敎の寺で、曾ては非常に盛つたものだが、今は殆どさびれてしまつた。場所は稻田の側の小丘で、琵琶湖の近くで、濕地であるが、蚊の群集は甚しいらしい。ジは佛敎の殿堂といふ意で、テンネンは自然の産出といふ意である。名そのものが、平和、閑寂を現はして居る。躑躅の紅い花を居ながらにして見られるのは甚だ嬉しかつた。

花崗石の石標を見ると、ここに五百羅漢がある。それは大きな堂の周圍に金箔や漆塗の偶像が立並んで居る。その側に祭壇のある本堂がある。こゝは住職の老僧が朝またきにおつとめをする處であるのだ。己れの室は本堂に續いた處で、寺の家族の住んで居る處からは大分離れて居る、二方は明るい庭に面して居る。わが室の一角は池の中に突出して居て、庭園へは右左に石の階段があつて、小路へ通して居る。庭の先の方は急、高くなつて松が植つてある。此小丘の麓には岩石が突出して居つて、根元には躑躅が一面に咲いて居る、その石間には佛陀とその十六弟子の石像がある。いづれも蘚苔蒸して、岩石と同様になつて、遠くから見れば、何れをそれと見分けが附かない位である。松の木下や藪蔭を縫ふた石の小坂を上りつめると、松の木の間か

ら廣潤な沃野を見下ろす。西方には鏡のやうな琵琶湖や小島や。遠山が見える。われは屢この丘に往來した。或時は月明かな夜に上つた。紅の躑躅のかすかに見える。それも忍冬のやうな匂で、それと知らるゝのであつた、四面寂として、たゞ稻田の蛙の啼音のみ徒に聞ゆるばかり。

日中杜の中は蟬の聲で喧騒を極めて居るが、その中に新しい花を發見したり、好風景地を得たのは嬉しかつた。竹林の前の小路は白い花 (dentizia) で埋まり、その中には薄紅の百合が咲いて居る、われのこれまで見た内ではこれが最愛らしい花であつた。テンネン寺の坊さんぼうさんが、われの作品を一枚所望した、それは寺の什物として掛けて置いて、好事の外國人を驚かしたといふのであつた。寺の家族は父がソーキン母がオシゲサン、子はタカキといふて彦根の警察へ勤めて居る。われを皆友人として遇して、機嫌をとつてくれた。タカキは近世の教育を受けたもので、彦根の學校では英語を教える、往々小供が町中エトでABCと叫ぶを聞く。しかし、エース(然り)位しが出來ないので、話は、エースから直に日本語になつてしまふ。

美術も政治宗教經濟と等しく人世の幸福進歩のために使用するべきものなり、美術は美術の爲めに耕すべからず、美は眞と善とより離縁すべからざるなり。

ニコライ、ガイ